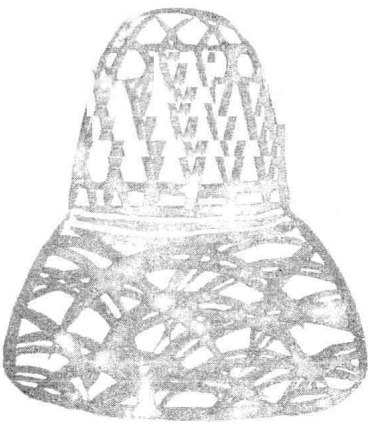
新吾十番勝負

一

美女丸の巻

川口松太郎



新潮社版

新吾十番勝負（美女丸の巻）

昭和三十二年十二月二十一日　印刷
昭和三十二年十二月二十五日　発行

定価二六〇円
地方売価二七〇円

著者　川口松太郎

発行者　佐藤亮一
東京都新宿区矢来町七一

発行所　株式会社　新潮社
東京都新宿区矢来町七一
電話東京（34）代表七一一一—九
振替　東京八〇八番

乱丁、落丁のものは本社又はお買求めの書店にてお取替へ致します。

印刷・塚田印刷株式会社　製本・神田　加藤製本所
© Printed in Japan

目次

美女丸誕生……五
第一番……九八
第二番……一八三

挿　裝
絵　幀

成　江
瀬　崎

一　孝
富　坪

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

新吾十番勝負

美女丸誕生

人を切って見たい——と頼方は思っている。なかなか厄介な望みだ。一真流の免許を受けてからは真剣で人を切りたい欲望が、絶え間もなくひそんでいる。

「剣法は人を切るためのものか。己れを護るためなのか」

と、彼はきき、

「乱世には切り、平時には護ります」

と一真は答えている。

「切る経験を持たずして護れるか」

と、頼方はへりくつをいう。

「切る経験は困難です」

と、一真も持てあまし気味だ。

「切ってよい人間はいないか」

「そんな者はおりません」
「むだな人間がいるはずだぞ」
「どんな者も何かの役には立っているのです」
「いない方が世の中のためになる悪人もいるはずだ」
「悪人は掟が成敗します」
「掟に触れずして悪事をするやつなら切ってもいいか」
「どのような悪事も法に触れなければ裁けません」
「法はおれが作る。裁く権利もおれにある。世道を害する者なら切るっ」
と、終いには腹をたてて叫び出す。
「善悪の見分けは困難であり、人を切ろうとなさるお心がすでに悪心かも知れません」
「仏法には破邪の剣があり、政道を乱す者は裁いて当然ではないか」
「切るに価する悪人が居るでしょうか。あやまって善人を切れば生涯の禍根を残します」
一真は彼の気性をよく知っている。反対すれば反発し、条理をつくせば思案する。お側御用の宮野辺貢(みやのべみつぐ)に、
「悪人はいないか。成敗可能の罪人をさがしてくれ」
と、いい出したのもその日の夜だ。
「どういう意味です」
と貢は驚いてぽかんとした。
「人が切って見たいのだ」
「何のためです」
「一真流の免許を受けながらしょせんは竹刀のたたき合いで、真剣勝負の経験がない。免許の腕がどれほど切れるか試したいのだ」
「腕をためすだけのために人殺しをなさろうというのですか」
「切った方が多勢の喜ぶ者がいるだろう」
「切ってよい人間なぞおりません」
「死罪ときまった罪人ならいるだろう」
「それは不浄の殺人で、御身分高きお方には許されません」
「覆面すれば知れまい。真剣で人を切って手ごたえを試したいのだ。一度でよいから切らせろ」

と、まるで子供のだだも同じだ。

頼方は苦労知らずに育っている。貞享元年十月二十一日に紀州の和歌山城で、徳川光貞の三男に生れて、幸福極りない幼年期をすごした。紀州家五十五万石の若殿だが、母はおめかけの於由利の方。一夫多妻時代で、将軍も大名も臨腹の庶子が多く、おめかけの子でも軽蔑はされないが、長男に生れない限りはそれほどの厚遇も受けられない。長男は将来の主人という意味の尊敬を払われて別扱いを受けるが、次男三男は冷飯っ食いの部屋住みで、身分も低いが束縛もなく、家臣たちも親しみやすくて、のんきにのんびりと成長する。頼方も典型的三男坊で幼名は源六、十歳には新之助、十三歳に元服して頼方と改め従四位下右近衛権少将に任官した。徳川一門の子供たちは、元服すると位がつき、ばかでもちょんでも格式だけは持たされる。十四歳の元禄十年には越前の鯖江に封じられて三万石の大名になった。どうして鯖江へ行ったのかはよくわからないが、徳川家直支配の天領地を与えたのかも知れない。和歌山にいれば部屋住みだが、三万石でも大名になれば一城の主でどんな生活も自由自在だ。それだけに我がまま一杯で、

「人を切りたい」

と、いい出すととめようとしてもとまらない。剣道指範は放生一真流の武田一真。放生津潟の浪人剣士が一流を編み出して一真流と自称し、越中加賀越前の北陸路に繁栄した剣法であり、頼方も十六歳から教えを受けた。世間知らずの青年大名は、免許を受けると腕がむずむずして、真剣で人を切りたくなり、

「だれかを切らせろ」

と、無理をいい、

「死罪人なら切ってもよかろう」

と、いうのだが、あいにく藩内には死罪人もない。

「犬は人の切れ味によくにているそうですから、犬をお切りなさいまし」

と、貢は数頭の野犬を集めた。三尺近い大犬が首になわをつけられて、駒ぜめの馬場につながれたが、頼方は

刀を抜かなかった。
「死罪人のあるまで待つ」
と、まゆをひそめてあきらめて、四、五日すると忘れてしまった。熱っぽいかわりには飽きやすくて、何事もすぐ忘れる。そんな性格なのだ。小大名でも参覲の義務があって、四月には江戸へ出る。江戸屋敷は紀州家の地続きで、城内お役は溜の間詰。式日には登城して将軍に拝謁する。一年間の江戸生活が頼方には大苦痛だ。
鯖江に帰れば自分が最高至上だが、江戸にいると右も左も先輩ばかりで、何かすると直ぐしかられる。江戸屋敷では父も母も、叔父も叔母も、水戸様も尾州様も、うるさい老人がうじゃうじゃいる。一年間をじっと辛抱して、帰国のお暇が出るとたちまち、野性の青年に立ちもどって、人を切りたい望みも棄てない。
しかしそれも国へ帰った時だけで、江戸にいればおくびにも出さない。人を切るどころか虫も殺さぬ顔つきだ。窮屈な江戸の一年がすみ、国へ帰れる日になると生れ替ったように生き生きとして、
「江戸を出ると夜のあけたような気がする」
と、のびのびと空を仰ぐ。
「殿は江戸がきらいですね」
と、貫も苦笑しているが、彼も決して好きではない。
「江戸がきらいというよりも、将軍や老中や父上や、うるさい方々がいやなのでしょう」
「どれもこれもむずかしい顔をして、笑いを忘れた人間どもの寄り集りだ」
「それにくらべるとお国はようございますね」
「江戸にいると大声で笑っても怒られそうな気がするのだ」
「私は笑ったこともございません」
帰国の道順もきちんときめられ、途中の道草もゆるされない。領分境の山道へかかるとカゴを使わずに歩き出すのも毎年の例だ。
「お乗物をお召し下さい」
と、すすめても、

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

「おれは歩きたい。カゴは窮屈だし馬にも乗りあきた」
と、カゴわきの武士をよそおって城下まで行く。
「城下民が土下座をしているではありませんか。おカゴの中に殿がいらっしゃると思っているのですから」
「そう思わせておけ。おれはカゴわきの武士になるから乗物の戸をあけるな」
と、家臣のような顔をして、カゴわきにつきそう。お国入りを迎える城下の群集が、道の両側にうずくまってざわめいている。徳川直支配の天領民は、紀州家の若殿を喜んで、頼方の人気も満点だ。顔を見ようとする者が、道の両側を埋めているが、塗笠をかぶった頼方は、
「おれが歩いているとも知らずに、空カゴへ頭を下げて」
と、いたずらそうに笑って歩く。
「大声をなさると判ってしまいますよ。カゴの中に座っていらっしゃると思っているんですから」
「笠を深くすればだれにも知れぬぞ」
ちょうどその時、供先へ白いものがころがって来た。日除の丸い菅笠だ。笠を追って町人がおカゴ先へ飛び出した。風に笠を取られたのか、お供先を汚してはならないと思ったのか、あわてて飛び出したのが、目と鼻の先だ。
「無礼者！」
供先の若い武士が叫んだ。お国入りの供先は重要な公式行列で、無礼討ちも許される。
「申し訳ございません」
と、男が道端へもどろうとすると、供先は柄袋を外した。同時に頼方も刀を握った。
「切ってもよいのだ」
と、瞬間に思ってぬいた。
この男は切ってもいいのだ。切られる罪を犯しているのだ——そう思いながら走った。切ってもいい人間を見つけた喜びと不安とが同時にあった。供先を汚した罪人は、おとがめを恐れるように立ちすくんで首をたれている。頼方は無言で斜め横に刀を振った。

ぶるんと奇妙な手ごたえがあって男の悲鳴が不気味だった。貢がかけよって頼方の手から血刀をとる。道ばたの群衆がさっと散って行く。が、行列は一刻も足をとめていない。何事もなかったように静々と行く。血刀を貢に渡して頼方は再びカゴ脇へもどった。胸がどきどきして息ぎれがする。ただの一刀で、斜め横に払っただけで、それほど力も入れていないのに、息ぎれはとまらなかった。

「人を切った」

と思う実感に、幾分の悔が残っている。

城へ帰っても頼方は物をいわなかった。頼方ばかりでなく供の全員が憂いをふくんでいる。国へ帰れる喜びにはしゃいでいた一同が、急に黙って静かになった。

「今日はおれがいけなかった」

やがて彼は貢にいった。

「いいえ」

と、貢は、

「あれでよろしいのです」

と、いったが、声は低かった。

「いいのか」

「はい」

「供先を汚す者は無礼討ちでよいのか」

「よろしいのです」

「間違いはなかったのか」

「ございません」

強くうなずいていながら顔が暗い。頼方の気持も晴れなかった。夜になっても翌日になっても、胸がつかえて、切られた男の顔が消えなかった。貢もなるたけ話を避けようとしていながら、何時の間にか話しが出る。

「人を切る事は厭なものだな」

三日目になっても頼方はまだいった。

「もうお忘れ下さい。お心にとめていてはいけません」

と、貢の顔もまだ暗い。

「切られた相手は判っているのか」

「判っておりません」

「調べなくともよいのか」

「どうせ名も無い町人です。殿のお手にかかった幸せを喜んでいるでしょう」
「死んだのか」
「死にました」
「職業は何だ」
「なぜ気になさるのです。殿はこの国の主ですから、何をしてもよろしいのです」
と、身分も名前も教えなかったが、相手はまだ死んではいなかったのだ。越前屋半六という薬行商の元締で、城下民の有力者であった。

薬種行商は越中の富山から出て日本全国へひろまっている。福井には越前屋重兵衛という元締があり、半六はその部下に属して鯖江近郊一帯の縄張りをまもっていた。医薬の発達しない山村では薬種が公共的意味を持ち、行商人には縄張があり、親分子分の関係が守られて、だれでも売り歩くわけにはいかない。半六は鯖江付近の元締で、十人の子方を抱え、仁侠の気風を持ち、城下民の信望もあつく、年もまだ四十一の働き盛りだ。人気のある男だけに、お供先の無礼討ちが城下中の大評判になり、領民全体が半六に同情した。肩先から切り下げられて重傷を負い、虫の息になって越前屋へ担ぎこまれたが、半六はもう物がいえなかった。口をぱくぱく動かしているばかりで、娘のお長が口もとに耳を寄せても、息がかすれて聞きとれない。現場を見ていた人たちは、
「笠が飛んだのを取りに行ったのがいけなかった。あっと思う間に供先の武士が切ってしまってあやまることも逃げることもできなかった」
と、涙ぐんでいう。
「何の悪気があったわけではなし、笠を拾いに行っただけなのに」
「それも他国の人間ではなし、御領内の住民を、いくら殿様でも無慈悲にすぎる」
と、だれの思いもみんな同じだ。取りすがって泣いているお長を見ると、十人の子方もいきり立った。殿様の供先を横ぎってはならない規則はだれでも知っている。

知ってはいても無礼討ちを受けた者はまだいない。
「殿様と領民は親子のようなもので、愛情を持ち合うのが当り前なのに、無礼討ちは残酷すぎる」
と、若い子方は泣いて口惜しがる。
大きな荷を背負って山村を売り歩く行商人は、腕っぷしも強ければ気性も荒く、
「親方が死んだら泣き寝入りにはしねえ」
「仕返しはきっとする」
と、誓い合って半六を見まもった。が、半六はもう死人同様で、口もきかなければ、食事も通らず、苦しそうにあえぎつづけて五日目には息を引きとった。供先の無礼討ちは死罪人扱いで、公けには葬儀をいとなむこともできず、家内でこっそり葬らおうとしたが、菩提寺の誠照寺には、千人近い会葬者が面あてがましく集った。
「殿が鯖江に来て最初の失敗であった」
と、剣道師範の一真は、
「紀州家の若殿を迎えて喜んでいたのに今度の事件では全領民が殿を恨んだ。貴公がついていて、なぜこんな間違いをしたのか」
と、責をしかったが、誠照寺に集った城下民は葬式が果てても解散しなかった。
領民一同の漠然たる反感だ。さしたる罪でもないものを、有能な人物が殺されては、
「安心して町を歩くことも出来ない」
と、群集はわめく。
「殿様の行列を見たら逃げ出すのか」
「戸をしめて寝てしまうのか」
と、そんな声も飛び出す。
「おれたちの不安心を重役たちは知っているのか」
と、名主総代が、
「御家老の立石様にお目にかかって話そう」
と、いい出したが、
「この多人数では強訴の疑いを受けるから代表者を選んで行け」
と、お長を寺の本堂に待たせ、二十人の総代を選んで、

国家老立石左太夫の屋敷へ押して行った。
左太夫は紀州家の用人格で、若い頼方を補佐するために光貞の命令で鯖江へ来ている。五十五万石の御本家から嘱望される人物だけに、頼方も彼には一目おいて、城内一の勢力者だ。城下民代表の二十人が、
「強訴ではございません。越前屋半六の過ちを許して頂きたくお願いにまいったのです」
と、玄関の式台に並んでいった。この時の左太夫はまだ半六の事件を知っていなかった。お国入りの当日は左太夫も行列に並んでいたが、ほんの一瞬の出来ごとだったので、気のついた者は少なかったのだ。
「お供先を汚した罪はまぬかれぬが、無礼討ちは気の毒であった。いずれ何分のさたをいたす」
と、左太夫もやさしくいった。
「お情のこもる御さたを頂きませんことには、表向きの葬式もなりかねます。家内だけの密葬をいとなみましたるところ、城下の全住民が参集して近年まれなる大葬儀になりましたから後日におとがめのございませんように」
と、総代たちは国家老の前でも悪びれなかった。城下民代表を帰したあとで左太夫が宮野辺貢を呼び出すと、
「越前屋半六は私が切りましたのです」
と、貢は即座にいった。
「お国入りの行列ですから、御威光にもかかわると思いました」
「城下民の激高を知っているか」
「存じてはおりますが、間違ったことを致したとは思いません」
「供先の無礼討ちはろうぜきのあった時に限る。わずかな過ちを切り棄てるのは乱暴であり、領民を愛する道ではない。お国入り以来まだ日も浅く、領民の信頼が大切であるはずなのに、お側役としては慎重を欠く」
と、しかりつけて謹慎を命じた。頼方の罪を引き受けて、家老の手前をつくろったのだが、頼方も黙ってはいず、
「悪いのは自分だ。貢には罪がない」

と、反抗した。

「町人半六を切ったのは自分であり、今は非常に後悔している」

と、若いだけに言葉も飾らず、

「カゴに飽きて歩いたのが悪かった。供先の武士が叫んだので、かっとして夢中で切った」

と、正直にいった。

「それはいよいよ怪しからぬことです」

と、左太夫は目をつるし上げて、

「お国入りの行列に、そのような曲事があれば、公儀よりのおとがめも必定です」

と、おどしつけた。

公儀と聞くと頼方は顔色を変える。御本家とか、公儀とかいわれると、それだけでもびくびくして、

「内聞にせよ。貢の切ったことに致してくれい」

と、急に声を低くする。

「向後はお慎しみ遊ばしますか」

「再びはせぬ」

「では、貢を罪に落して閉門をお命じ下さい」

「彼には気の毒だな」

「お側役には当然の処置ですから御口外なさってはいけません」

と、貢に閉門を命じたが、この秘密も長くは保たれなかった。半六切りは藩主頼方自身であり、貢の罪ではないのだと、だれいうとなく聞え出し、それがお長の耳にも入ると、

「お父さんを切った相手が殿様だといううわさは本当かしら」

と、子方の庄三郎にいった。行商人を子方といい、元締を親方と呼ぶ。

「私もうすうす聞きましたが本当でしょうかね」

「家来のような姿をして笠をかぶり、カゴ脇についていたというんだよ」

「何といってもまだ年が若く子供のようなところがあるから、そんないたずらをしたかも知れませんね」

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com